



## 宮城・仙台城二の丸跡（第五地点）

四〇mの急崖上に立地しており、また、二の丸・三の丸もそれぞれ海拔六一～七八m、四〇mの階段状の河岸段丘面上にあり、自然地形を巧みに利用した配置となっている。

1 所在地 宮城県仙台市青葉区川内 東北大学川内構内

2 調査期間 一次 一九八五年（昭60）四月～五月、二次 一九八七年九月～一月、三次 一九八八年三月～一九八九年四月

3 発掘機関 東北大学埋蔵文化財調査委員会

4 調査担当者 渡辺信夫・須藤 隆・梶原 洋・佐久間光平・山田しょう

5 遺跡の種類 近世城郭跡

6 遺跡の年代 一七世紀～一九世紀

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

仙台城は、仙台市の西方約二km、広瀬川を渡った通称青葉山の東端に位置する近世城郭である。この仙台

城の本丸は、三方（北・東・南）を広瀬川と竜の口峡谷に囲まれた海拔一一五～一

九〇mの急崖上に立地しており、また、二の丸・三の丸もそれぞれ海拔六一～七八m、四〇mの階段状の河岸段丘面上にあり、自然地形を巧みに利用した配置となっている。

仙台城は、いうまでもなく一七世紀初め伊達政宗によって築城がはじまり本丸部分が完成されるが、泰平の世にはその山城的な立地は何かと不便なため、二代藩主忠宗はその麓（川内地区～現東北大学構内）において二の丸の造営を行う。これ以前、当地には政宗四男宗泰の屋敷、その北隣には長女五郎八（いろは）姫の居住する西屋敷があつたことが知られている。この地に二の丸が完成してのち、仙台藩の政治・儀式の中心はここに移され、さらに二代藩主以降その居館となり、二の丸はいくつかの変遷を経ながらも、事実上幕末まで仙台城の中核として機能していく。

仙台城二の丸跡第五地点の三次にわたる調査は、川内地区（二の丸跡）の東北大学付属図書館の増築にともない実施されたものである。調査地点は、文献史料や絵図によれば、江戸初期には五郎八姫の居館である「西屋敷」、元禄期以降は二の丸中奥の建物が置かれていたと推定される区域である。

調査の結果、瓦・陶磁器を中心とする三万点にも及ぶ大量の遺物とともに、江戸時代の各時期の遺構群が検出された。これらの遺構群は大きくみれば三期に分けることができ、I期は江戸初期の西屋敷（一七世紀初～中）、II期はこの西屋敷廃絶後で二の丸中奥が置かれ

るまで（一七世紀後半）、Ⅲ期は「の丸中奥の時期（一七世紀末～一九世紀後半）に相当すると考えられる。遺物には他に、箸・漆椀・木簡・下駄等の木製品、煙管・古錢等の金属製品がある。

木簡は、Ⅱ期に属すると推定される廃棄層中から一二一地点(1)～(16)、Ⅲ期二の丸の時期のピット埋土中から一点(17)、計二三地点出土している。廃棄層は、一期の池状遺構を埋め立てているもので、多量の木屑・木端とともに漆椀・箸などの木製品、食料残滓（種子・魚骨など）を含み、何層にもわたって堆積していた。廃棄層の厚さは二〇センチメートルによつては二m近くにも及ぶ。

## 8 木簡の釈文・内容

- (1) 「<sup>(穿孔)</sup>水こんにやくかんひや」 165×27×4
- (2) 「<sup>(穿孔)</sup>五嶋するめ」 122×27×4
- (3) 「<sup>(穿孔)</sup>たゞみいわし」 126×17×3
- (4) 「<sup>(穿孔)</sup>塩引 横川」
- 「<sup>(穿孔)</sup>高橋□兵衛」 130×17×48
- (5) 「<sup>(穿孔)</sup>塩引
- 「<sup>(穿孔)</sup>高橋」 149×36×2
- (6) 「<sup>(穿孔)</sup>高橋
- 「<sup>(穿孔)</sup>熊野久う」 167×(11)×3
- (7) 「米四斗五升入 □船村」 120×23×6
- (8) 「米四斗五 <sup>〔升カ〕</sup>」 142×30×6
- 「『増田村 檜 <sup>〔断カ〕</sup>』」
- (9) 「<sup>〔小カ〕</sup>豆五斗入 □□□
- ×ノ一月廿 <sup>〔日カ〕</sup> 郡山町 忠□郎×
- (10) 「米四斗五升入」 (106)×19×3
- 「元禄四年名取柳生村  
十一月三日 勘九郎」 (166)×124×4
- (11) 「<sup>(追筆2)</sup>未ノ壬八月廿四日」 126×17×3
- 「<sup>(穿孔)</sup>みそ細大じん『百三拾本』<sup>(追筆1)</sup>」
- (12) 「<sup>〔禄カ〕</sup>元□ □□□」 167×(11)×3
- (13) 「<御小人 清左×」 (69)×13×3
- 「▽ 吉×
- (14) 「▽ 吉×
- (15) 「▽ 吉×
- (16) 「▽ 吉×
- (17) 「▽ 吉×

- (14) 「平泉から御子籠」  
・「松木安兵衛」  
112×11×3
- (15) 「小塚沢徳四  
(穿孔)  
。 執市」  
104×64×10
- (16) 「□のり入  
みつ入  
吉内様」  
吉助  
224×(48)×7
- (17) 「享保拾壹年 □□原  
五拾文  
鶴ヶ谷村 喜助」  
170×23×6
- これらの木簡群は、品物に付けられた荷札が多いことが特徴である。付札の大部分の上部には孔が穿けられている。これらの品物は、(1)の水こんにゃくなどといった精進料理に使用するものや、(2)の五嶋するめ、(4)の平泉からの子籠(しゃけの卵)など優良産地からのもの、みそ・大根・米などの日常の食品である。また、この中には(1)のように追筆が二筆認められるものや、(4)(5)のように同一の品物(塩引)に関して高橋という人物が浮かびあがるなど、その墨書の過程を考えさせるものもある。なお(3)の御小人は、西屋敷の近くにあつた御小人屋敷に関連するものであろう。

年代のわかるものは四点あり、(10)(1)は元禄四年、(12)は元禄年間、(13)は享保一一年である。このうち(13)は二の丸の時期のものであり、そのほかは元禄年間の西屋敷廃絶期のものと考えられるので、発掘の成果とは矛盾しない。なお(13)は、竹の表面に刃状のもので刻字したもので、裏面には手を加えた痕はなく、竹製の器物である。

#### 9 関係文献

仙台市教育委員会『仙台城』(一九六七年)

(佐久間光平・山田しょう・田中秀和)

